

「鐘の音」に「音を添へ」るとき

安道 百合子

一

中世物語の一作品『夢の通ひ路物語』に登場する入水する姫君が最後に残した歌は、

波風も此世つきぬとひびきそふかねの岬に今ぞたへぬるといふものであつた。

姫君が入水した場所は、これも『源氏』で玉鬘上京の際に一度だけ登場する「金の岬」という場所で、その地名と「鐘」とをかけて詠まれているが、実際にこの場面に鐘の音が聞こえるわけではない。ただ、暗い夜の海上で波風の音が響きを増してゆくなかで、死に向かつて姫君の心情が高まって行くという歌の発想は、浮舟詠において、鐘の音が絶えていくその響きに逆に我が泣き音を添えることで一層命を限る方向に気持ちを傾けた、その心情を下敷きにして生み出されたものと、まずは好意的に解釈することができよう。

中世物語において、入水する姫君は、『八重葎』『木幡の時雨』『松陰

中納言物語』などにも見え、『源氏』の浮舟、『狭衣物語』の飛鳥井姫の影響を強く受けて造形されている。『夢の通ひ路物語』の場合は、入水に至る経緯を語る部分には『狭衣』の影響が著しく、最後の歌に關しては浮舟の歌を念頭においているらしい。「かね」から「鐘」の連想にはやや強引さを感じるものの、入水というモチーフから浮舟が連想されるのは必然的であろう。しかし、踏まえられた浮舟の歌は、入水というモチーフにおさまらないところでも中世の諸作品にいろいろに影響を与えているのではないだろうか。

二

まず、『源氏』の浮舟詠を確認しておきたい。浮舟は入水を決意しつつも、後のことを思い悩んで歌を詠む。

なげきわび身をば棄つとも亡き影にうき名流さむことをこそ思へ
(新全集⑥一九三頁)

さらに、どのように入水を決行しようかと考えあぐねるところは、夜となれば、人に見つけられず出でて行くべき方を思いまうけつつ、寝られぬままに、心地もあしく、みな違ひにたり。明けたてば、川の方を見やりつつ、羊の歩みよりもほどなき心地す。

(一九三頁)

と描かれる。そこへ、京の母親から、不吉な夢を見たからというので手紙が届けられる。折しも誦経の鐘が聞こえてくる。

鐘の音の絶ゆるひびきに音をそへてわが世つきぬと君に伝へよ

母親に伝えてほしいと念じながら、「もの枝に結びつけて」おかれたこの歌は、入水前の最後の歌である。浮舟は結局助けられるが、入水前のこの歌は『物語二百番歌合』にも引かれ、その後の物語にも大きく影響を与えた。特に入水というモチーフは、中世物語において、それを模したものを多く生み出した。

三

当然のことだが、『源氏』からの影響を強く受けた後世の作品は、中世物語にとどまらない。中世の日記文学諸作品においても、『源氏』からの影響の指摘・考察は早くからあり、一概にジャンルの違いと割り切れないところも多くある。

そんななかで、『とはすがたり』の類型的表現の多さについては、早くから多くの先学の指摘があったところである。こうした類型的表現については、『源氏』を筆頭とする「王朝以来の物語」に由来すると考えられていたが、辻本裕成氏が、後朝の描写の類型性について論じられたところによれば、暁の別れの場面の景物として「鐘」八例、「鳥」五例、「袖の涙」四例、「月」五例、「横雲」三例、が認められ、それらは、同時代の和歌のバターンに由来するとされた。「暁の鐘」は宇治十帖に三例あるものの、あくまで寺の鐘、宇治という場所の景物であって、後朝場面の道具立としての「鐘」などではなかったのである。またいわゆる読経の鐘としては、明石巻に「鐘の声松風に響きあひても

の悲しう」(新全集②二五六頁)があり、「鐘の音」が何らかの登場人物の心情にはたらきかけるという機能は認められるものの、これもやはり後朝場面の類型的表現に適用例ではない。

さて、『とはすがたり』の類型的表現のうち、「鐘」を含む例は、次のものである(傍線部、実線は辻本氏の付したもので、私に波線を加えた)。

1 十七日の月西に傾きて、東は横雲渡る程なるに、(中略)折知り顔なる鳥の音も、しきりにおどろかし顔なるに、観音堂の鐘の音、
だゞ我袖に響く心地して、(中略)隈なかりつる有明の影、白むほどになりゆけば、
(新大系一頁)

2 明け行鐘の声聞こゆるこそ、げに逢人からの秋の夜は、言葉残りて鳥鳴きにけり。
(三二頁)

3 明け行鐘にもよほされて、立ち出させおはします。有明は西に残り、東の山の端にぞ横雲渡るに、(中略)「又よ」とて出で給ゆる御名残は、袖の涙に残り、
(四〇頁)

4 明け行鐘に音を添へて、まかり出給し後朝の御袖は、よそも露けくぞ見え給し。
(六四頁)

5 明け行鐘に音を添へて、起き別れ給さま
(七九頁)

6 明け行く鐘もよほし顔なれば、出さまに口すさみしを、しひて言へれば、

世の憂さもおもひつぎぬる鐘の音を月にかこちて有明の空とやらん、口すさみて、出ぬるあとも悲しくて

鐘の音に憂さもつらさもうち添へて名残を残す有明の月

(二〇三頁)

7 月の入きの山の端に横雲白みつゝ、東の山はほのくくと明くるほどなり。明け行鐘に音を添へて、帰り給ぬる名残、いつよりも残り多きに、

(二四二頁)

8 音羽の山の鹿の音は、涙をすゝめ顔に聞こえ、即成院のあか月の鐘は、明け行空を知らせ顔なり。

鹿の音に又うちをへて鐘の音の涙言問ふあか月の空

(二〇七頁)

確かに、後朝場面の道具立としての類型化が認めらるが、これを見ると、「鐘」の例には、「音を添へて」「響き」などの語句を伴っている場合が多いことに気付く。そこで、曉に限らず、「鐘」の語に注目してみると、次のような例が見える。

9 待つ宵には更け行鐘に音を添へて、待ちつけて後は又、世にや聞こえんと苦しむ (五一頁)

10 結願には、露消えたまひし日なれば、こころさらけつち添ゆる鐘も、涙もよほす心地して、

折く鐘の響きに音を添へて何と響き世に猶残るらん

(一五四頁)

9は雪の曙との関係について思いを語る文脈に位置し、恋人の来ないまま夜更けを告げる鐘の音を聞くと共に、泣き声を添えて聞くことをあらわしている。また、10は有明の月の三回忌の場面で、鐘の音に涙がさそわれる様子をあらわしている。特に和歌表現には、浮舟詠と

の類似が明白で、鐘の音に我が泣き音を添えて生き残った我が身の憂さを詠んだものとなっている。

ここには、時を告げる鐘と読経の鐘との違いはあつても、「鐘の音」に、我が「泣き音を添える」という発想の一貫性がある。つまり、「鐘の音」の描写は、作者が今にも泣き出したくなるような心情の高まりを促すものとして、描かれているように思われる。そこには、意識的にか無意識のうちにか、浮舟の歌が影を落としているのではないだろうか。後朝場面の類型としての「鐘」は確かに認められるが、それは同時代和歌の「鐘」の詠みぶりに影響を受けたものなのだろうか。

四

「八代集」に「鐘」は二十六例存する(拾遺1・後拾遺2・金葉2・詞花3・千載7・新古今1)が、『拾遺和歌集』一三三九番歌は「入相の鐘」で、「曉の鐘」は『後拾遺和歌集』九一八番歌(あか月のかねのこをこそきこゆなれこれをいりあひとおもはましかば)から見える。またこのうち、「音を添へ」を含むのは「千載和歌集」に一例(五九七番・法印成道)、「おもひきやけふうちならずかねのおとにつたへしふえのねをそへん」とは

とあるのみである。「曉の鐘」を読み、後朝の悲しみを歌うのに涙を詠みこんだのは『新古今和歌集』(二三〇番歌・慈田)。

あか月の涙やそらにたくふらむ袖におちくるかねのおとかながある。ちなみに、辻本氏が同時代の和歌のバターの資料とされた

『嘉元百首』「曉別恋」二十七首中三首の「鐘」は、

心にはいそがぬかねのおとぞうき名残有明の月にかこちて

あくるまのかねをも待たぬつらさかな夜ぶかき鳥の声に別れて

又いつと契もあへず鐘のおと鳥の八声にいそぐわかれば

(右から三六七番・一八七二番・二二七二番)

というもので、ここにも「音を添へ」と詠む例は見えない。

これらの和歌の用例を見ると、「曉の鐘」が後朝の別れの悲しさを呼び起こすものとして定着するのは、確かに中世和歌に至つてのことと思われる。暁の景として、「鐘」の描写があるのは、当時の和歌のパターンに由るものだという点はその通りだとしても、その「鐘の音」に「音を添へて」とある、『とはすがたり』の類型表現の由来とするには、直接結びつかないのではなからうか。ここに、浮舟詠が思い起こされていたと考えることはできないだろうか。『源氏』の女君に自らをなぞらえつつ日記を書き進める二条であれば、「鐘」という道具立と、後朝の身を切られるようになつらさと、「鐘」をきつかけにして「音を添えて」入水に至る浮舟の心情とに通い合うものを認めるということとは、十分あり得るのではなからうか。

五

伏見天皇に仕えた藤原経子による『中務内侍日記』は、冒頭、

いたづらに明かし暮す春秋は、ただ羊の歩みなる心地して、

(新大系二二四頁)

と始まり、浮舟巻を踏まえる。また「鐘の音」を詠む歌がある。

またあはれを添ふる鐘の音も枕にちかき心地して、いとあはれに物悲し。

我ならで鳥もなきけり音をそへて明けゆく鐘の絶ゆるひびき

ただ、心の中ばかり、つゞかぬ事のみ案せらるゝも、我ながらおかし。

(二二五頁)

「明けゆく鐘」ではあるが、「音をそへて」「絶ゆるひびき」という語が用いられており、一首は、浮舟の歌を踏まえたものと理解されよう。新大系(岩佐美代子氏校注)には「私だけでなく、鶏も鳴きましたよ。声をあわせて。夜明けを知らせる鐘の音の、今しも絶えようとする響の悲しさに。源氏物語の浮舟も、こういう時にあの「鐘のおとの絶ゆる響に音をそへて我が世つきぬと君に伝へよ」の歌を詠んだのでしようよ。」との解釈が示されている。

六

阿仏尼の日記『うたたね』には次のような場面がある。

例の人知れず、中道近き空にだにたどくしき夕闇に、契り違へぬしるべばかりにて、尽きせず夢の心地するにも、出で聞えん方なければ、たゞ言ひ知らぬ涙のみむせ返りたる。あか月にもなりぬ。枕に近き鐘の音も、たゞ今の命を限る心地して、我にもあらず起き別れにし、袖の露、いとどかこちがましくて、「君や来し」

とも思いわかれぬ中道に、例の頼もし人にてすべり出でぬるも、返す／＼夢の心地なんしける。

(新大系一六〇頁)

恋人との逢瀬を描いた一場面であるが、『源氏』『伊勢物語』を踏まえた章句が目につき、まさに恋愛物語の趣をたえている。そんな中に、後朝の悲しさをあらわす傍線部の表現がある。明け方を迎えて恋人と別れなければならない時に、本当に命も削られるかと思うほど悲しい思いをしていることを述べたものである。一見、恋の場面と入水場面とがそぐわないようにも見え、引歌指摘などはないが、これも朝を告げる鐘の音の奥に、浮舟の決意を固めた鐘の音を聴き取ることができまいか。

この後、人が寝静まつてから出家を遂げるといふ、まことに思い切った、無謀とも思われる場面があり、そのあとの描写に次のような歌と感慨がある。

歎きつゝ身を早き瀬のそことだに知らず迷はん跡ぞ悲しき
身をも投げてんと思ひけるにや。

そのまま出奔しようとして詠んだ歌だが、その時の作者にとつて、出家は入水に値する行為だつたと理解することもできよう。後朝の別れと、出家と、入水自殺。まったく次元の異なることのようにでありながら、『つたたね』の描写の限りにおいては、その心情に通い合うものがあるようである。

七

中世日記文学におけるこれらの例は、「鐘」に「音を添へ」て悲しみを表現するという浮舟詠の方法を媒介にすると、理解しやすい。浮舟物語は、入水というモチーフのみ受け継がれていったのではなく、「鐘」に「音を添へ」て表現された浮舟の深い悲しみが、後朝の悲しみを詠うときにも、またそれにとどまらない人生の哀感を詠むときの表現としても引き継がれていき、「鐘」の音をひとつの契機として描く中世和歌の世界における「鐘」の詠み方を作つていったというような経緯を、考えることができるのではないだろうか。

(注)

(1) 本文の引用は、『新編日本古典文学全集』(小学館)本、あるいは『新日本古典文学大系』(岩波書店)本により、それぞれ「新全集」「新大系」と略してその巻数(「源氏」の場合のみ)と頁数で所在を示した。

(2) 類型表現の多さについては早く市古貞次氏に指摘があるのを初めとして、注釈書のほぼすべてにおいて指摘や考察がなされる。

(3) 辻本裕成氏「同時代文学の中の」とはすがたり」(『国語国文』第五八巻第一号 一九八九年)。

——あんど・ゆりこ、梅光学院大学文学部講師——